

## スポーツを大切に思う子どもを育てる指導を求めて

－「総合運動部」の取組を通して－

和田 英明

子どもの体力・運動能力の低下の問題をはじめとする今日的な課題を受け、いろいろなスポーツを行って、バランスの取れた体の成長を促すとともに、自分にあったスポーツを見つけることができる部活動の取組として“総合運動部”の推進が求められている。そこで本研究では、総合運動部の中で「人を大切にするスポーツ活動」を実践し、運動やスポーツが得意な子どもと、苦手意識をもつ子どもが同じ活動の場で共に高まり合い、スポーツを掛け替えのないものとするために大切なことを明らかにしようとした。

## 第1章 子どものスポーツをめぐる

## 第1節 子どものスポーツをめぐる課題

子どもの体力・運動能力の低下の実態として、以下の3点がいわれている。

- ①子どもの世代が親の世代を下回っている。
- ②スポーツを日常的に行っている者の体力・運動能力は、行っていない者を上回っている。
- ③子どもの体力・運動能力の格差が広がり、体力・運動能力が低い子どもが増えている。

昨年度の指導者の意識調査では、精神的な持久力や気力の低下にかかわる記述が多くみられ、体力の低下が運動面にとどまらず、肥満や生活習慣病などの健康面、意欲や気力の低下といった精神面など、子どもが『生きる力』を身に付ける上で悪影響を及ぼしていることが窺われる。

スポーツを通した子どもの健全育成とは、体力・運動能力の向上だけを意図したものではなく、スポーツが人間形成に大きくかわり、心身の両面にわたる健全な発達を願ったものである。

## 第2節 現状を打開するために小学校部活動でできること

昨年度の意識調査より、子どもたちは達成や競争のスポーツの楽しさを求めているといえるが、苦手意識をもつ子どもは人間関係を気にすることなくスポーツをしたいと考えている。小学生のスポーツ活動は一部の運動能力が高い子どものための活動であってはならない。スポーツに対して異なる経験、異なる能力と異なる意識をもつ子どもたちが、同じ部活動で、互いに尊重して認め合い、互いに高め合えるような「共生」の視点を大切にしたいスポーツ活動を求めていきたい。

また、小学生の発育発達段階に合った運動を考えると、早期に専門化するより様々な運動を経験することが望ましく、複数の種目に取り組むことができる総合運動部の推進が求められている。

## 第2章 総合運動部が目指すもの

## 第1節 なぜ「総合運動部」なのか

昨年度の聞き取り調査より、子どもにとっての利点は以下のように考えられる。

- ・調整力を身につける発達段階に合った活動
- ・中学年の児童に多種目を経験させられる。
- ・今後の種目選択の準備ができる。
- ・放課後遊びの延長感覚で気軽に参加できる。

指導者にとっても、種目についての専門的な理解は必要でないことや、異動による部活動への影響を小さくできることなどの利点が考えられる。

## 第2節 総合運動部が大切にしたいこと

指導にあたって、スポーツが得意な子にも苦手意識をもつ子にも「達成」や「競争」をどのように楽しませるかという課題がみえてくる。

そのためにスポーツにおいては、勝敗や順位といった結果を重視した「結果目標」ではなく、特定の結果を導くために必要な具体的な行動や競技内容を重視した「行動目標」を設定すべきである。また、「競争」と「共生」は両立することを、子どもたちがスポーツ活動の中で実感を伴って経験し、意識できるようにすることが大切である。

今年度の研究協力校の事前の意識調査で、子どもたちがスポーツをして楽しくないときは「友だちと仲良く運動できなかったとき」や「ルールやマナーを守らない友だちがいるとき」であることがわかった。総合運動部においても、子どもたちがスポーツに集中できる環境をいかに保障していくかが課題である。

本研究では、総合運動部でスポーツの得意な子どもと苦手意識をもつ子どもが、友だちと仲良く、ルールやマナーを守って共に高まり合うスポーツ活動をしていくためには、「人を大切にするスポーツ活動」を展開することが大切であると考え、研究の構造を図のように考えた。

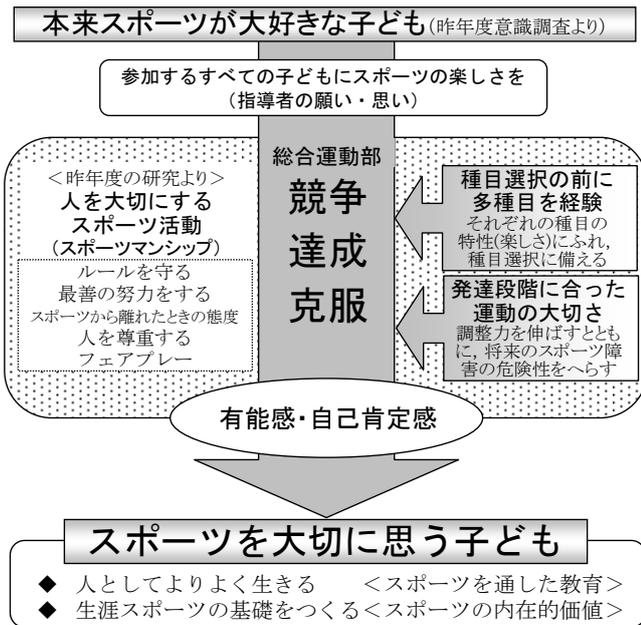


図 研究の構造図

### 第3章 総合運動部の実践

#### 第1節 研究協力校について

六原小学校では、「みんなの部活動」として取り組んできた良さは残しながらも、ルールを守ることを大切にしていきたいと考えた。また、交流会に参加し、それに向けて練習することでスポーツの楽しさを味わえるのではないかと考えた。

朱雀第三小学校では、走ることを中心に多種目に取り組み、スポーツを通して子どもたち相互の人間関係を深めていきたいと考えた。そこでまず、指導者が子どもにしっかりかかわることで子ども同士のかかわりも増やすことを考えた。

#### 第2節 「人を大切にするスポーツ活動」の実践

研究協力校で行った実践活動を「人を大切にするスポーツ活動」の5つの視点から振り返り、指導者のかかわりと子どもの変容をまとめた。

- (1)ルールを守る
- (2)フェアプレー
- (3)最善の努力をする
- (4)スポーツから離れたときの態度
- (5)人を尊重する

活動の中では、子ども同士のかかわりを増やすために、話を聞くことの大切さや、ルールやマナーを守ることを重視してきた。また、指導者が子どもにしっかりかかわる実践をしてきた。

#### 第3節 総合運動部の取組から見てきたもの

総合運動部として取り組むことができる活動をまとめた。

#### 活動例

1. 中学校へつながる競技種目
2. シーズンスポーツ
3. 体育学習の延長線上の活動  
(体ほぐしの運動や表現運動などを含む)
4. 昔の遊びなど、外遊びを含む活動
5. 複数の部活動参加が可能な日程を組むもの

また、実践の中で、経験する種目によって、子どもに育つものが違うのではないかとということもわかってきた。人間形成の大切な段階にある子どもたちにとって、育ちの面からも総合運動部の取組の大切さが強調されることになる。

研究協力校の子どもたちが、実践が進むと共に変容し、人間関係が改善して、参加した全ての子どもが楽しめる活動に変わっていく様子を見ながら、総合運動部で何を実践するかよりも、どのように実践するかの方が、子どもたちにとってはるかに大切であるということを確認した。

### 第4章 生涯スポーツの基礎を育むために

#### 第1節 スポーツを大切に思う子どもを育てるために

「有能感」「価値」「関係性」をキーワードに子どもたちの意識調査を行った。活動期間が短いため、必ずしも「有能感」は高まらなかったが、「価値」や「関係性」のポイントが上がることで、子どもたちはスポーツを楽しむことができるということが示唆された。指導者が「価値」や「関係性」について、子どもの実態を見ながらしっかり働きかけていくことで、子どもたちはさらにスポーツを好きになることがわかった。

#### 第2節 スポーツを通した健全育成のために

価値と関係性や、共生の視点を大切にすることは、部活動でも学級経営でも同じである。部活動を学級経営と同じ感覚で経営すれば、スポーツが得意な子と苦手意識をもつ子とが共に高め合い、さらにスポーツを好きになる活動が展開される。これこそが教師としての専門性を生かした部活動の指導の在り方といえるのではないだろうか。

子どもたちの人間関係が、フェアプレーに支えられ、「人を大切にするスポーツ活動」が展開される。そして、スポーツ活動で育った子どもたち相互の好ましい関係が、スポーツの場面から生活の場面に広がっていくことで、スポーツが子どもの人間形成に貢献することになる。それこそがスポーツを通した子どもの健全育成であると考えられる。